

はじめに

私たち研究者の重要な使命のひとつは研究成果を論文として発表することである。論文を発表するためには、通常同業者の査読によるチェック（ピアレビュー）をうけないといけない。つまり、他の研究者やコミュニティによる評価が、個々の研究者の活動に大きく影響する。それだけに、論文査読というのは重要な仕事である。しかし、重要であるにもかかわらず、論文査読には複雑な事情が絡んでいる。例えば、

- ◆ 査読には莫大な時間と労力がかかるという負担
- ◆ 自分を含めた数名の判断で著者らの人生が変わりうるという責任
- ◆ 査読の方法をきちんと教わっていないという不安
- ◆ 英語がうまく書けないという苦手意識
- ◆ 匿名といえども素性がバレてしまうのではないかという懸念
- ◆ ボランティアで行っているのだから多少のわがままは許されるだろうという甘え
- ◆ 査読をすれば何か見返りがあるのではないかという助平心

などがある。査読の方法や査読に対する考え方は研究者によってかなり差があるのが実情であるが、これまで公に議論されることはあまりなかった。そこで、雑誌「実験医学」に論文査読について7回の連載記事を執筆した。筆者の査読者やエディターとしてのこれまでの経験、実験医学読者を対象としたアンケート結果、各雑誌から得られた情報などを読者と共有した。本書の第1部はこれらの原稿に若干のアップデートを加えたものである。前半は、ピアレビューは必要だという前提で、できるだけプラクティカルな内容にフォーカスした。後半では、現在のピアレビューのしくみが抱える問題点などを中心に議論した。

第2部では、査読に関する考えをより広く知るために、九州大学の中山敬一先生、ワシントン大学の今井眞一郎先生、東京工業大学の田口英樹先生に座談会の形でご意見を伺った。国内外、さまざまな分野でご活躍の先生方の多様な考えをうかがうことができ、たいへん興味深いものとなった。

第3部は、査読コメントの例文集とした。とりあげた文章は、筆者がエディターとして審査してきた論文に対する査読コメントを参考にさせていただいたものである。筆者がエディターの仕事をはじめたのは2007年のことである。FEBS Lettersのエディターとして週に1本程度の論文のハンドリングをするようになった。義務的に仕事をこなすだけではおもしろくないので、その頃から少しずつ役立つ表現を集めることにした。その後、他のジャーナルのエディターも務めるようになり、例文もかなりの量になった。不足していると思われる表現をさらに追加してできたのが第3部の例文集である。

本書は

- ◆ 日々、査読をこなして疲れているPI (reviewer fatigue とよばれている)
- ◆ PIから査読の手伝いを依頼されて迷惑している（と誤解している）ポスドクや大学院生
- ◆ 今後査読をたくさんするようになることを楽しみにしている怖いもの知らずのPI候補
- ◆ 査読者の気持ちを知って自分の論文執筆に役立てようとするしたたかな筆者

など、幅広い読者に有用となるように心がけた。査読に付随する負担や不安が少しでも減れば幸

いである。

最後になりますが、巻頭言をご執筆いただきました大隅良典先生，座談会で貴重なご意見を頂戴いたしました中山敬一先生，今井眞一郎先生，田口英樹先生，原稿を読んで助言してくれた研究室のメンバー，企画から編集までお世話になりました羊土社編集部の本多正徳様，早河輝幸様に心から感謝申し上げます。

2021年5月

水島 昇